

# 同朋新聞

どうぼうしんぶん

Dōbō Shimbun

4

Vol. 761 April 2021

Shinran  
850th  
800th

〔慶讃テーマ〕  
南無阿弥陀仏  
人と生まれたことの意味をたずねていこう



慶讃特設サイト 検索

発行所  
真宗大谷派宗務所  
代表者 但馬 弘  
編集／東本願寺出版(真宗大谷派宗務所出版部)  
〒600-8505 京都市下京区烏丸通七条上る  
TEL.075-371-9189(東本願寺出版)  
購読料 無料  
送料 1部1万円1,300円(部数により変動)  
振替口座番号 01000-6-27404  
加入者名 東本願寺出版部



障害があってもなくても、  
子どもも大人も人としていろいろな思いや  
葛藤の中で生きている存在であり、  
仲間だということが私の原点です

北川 聡子



### 今月の写真

むぎのこでの子どもたちの様子。〈提供：むぎのこ〉  
「人って大丈夫なんだよ。怖くないんだよ。安心できるんだよ。ほっとできるんだよ」  
乳幼児期の子どもたちが、自分を受け止めてくれる存在がいることを感じる  
経験の積み重ねを大切にしている。(2・3面参照)

### CONTENTS

2・3面

#### 人間といういのちの相

自分と人を信じる土台をつくる  
—子どもは命を輝かせる  
社会の宝物—

北川聡子さん



6・7面

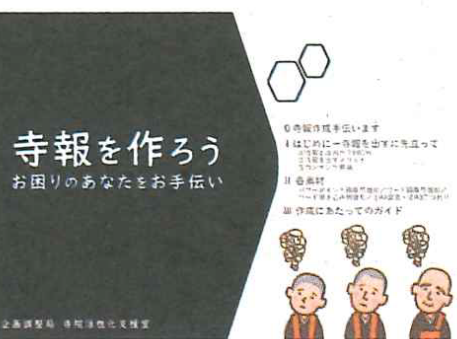
#### 特集

組門徒会に  
かけられた願い



10面

寺報作成のノウハウを  
オンラインで



4面

現在を生きる

人間が人間であるために

5面

はじめて読む 正信偈 第18回

8面

仏典の星ぼし 第18回

9面

聞 今月の法話 第8回

真宗門徒として帰敬式(おかみそり)を受けましょう

# 自分と人を信じる土台をいける

## 「子どもは命を輝かせる社会の宝物」

インタビュー ● 北川 聡子さん

「一人の子どもを育てるには、村中の大人の知恵と力と愛と笑顔が必要を基本方針として、三十七年間にわたって札幌で障害のある子どもたちや家族とともに歩んでこられた北川聡子さん。施設長を務める社会福祉法人麦の子会は、乳幼児期から成人期まで幅広い年代の支援を行っている「子育ての村」。障害を抱える子どもたちのかかわりの中で必要な支援から見えてきた人間の相とは。インタビューを通して考えます。※本文中の「麦の子」は法人名を、「むぎのこ」は施設名を表します。



1983年、大学卒業と同時に、仲間3人とともに障害のある子どもたちが毎日通える場として「麦の子学園」をスタート。1996年に「社会福祉法人麦の子会」として認可を受ける。現在、「社会福祉法人麦の子会」総合施設長。乳幼児期から成人期までの発達支援・家族支援・相談支援・地域支援の4つを柱に、専門的な支援を行っている。昨年、むぎのこの37年の軌跡をまとめた『子育ての村ができた！発達支援、家族支援、共に生きるために』（福村出版）を出版。

この紙面では、さまざまな人をおして、現代社会の抱える課題や人間そのものについて考え、  
**宗祖御遠忌テーマ**  
「今、いのちがあなたを生きている」、  
**慶讃テーマ**  
「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」  
の学びを深めていきたいと思ひます。

### 自閉症の子との出会い

——大学卒業と同時に仲間とスタートされた施設麦の子学園への思い、現在に至るまでの活動について教えてください。

私の障害児への支援の原点は、一人の自閉症の子との出会いです。その子は、他人や器物に攻撃を加えたり、自分で自分自身を傷つけたりする、今でいえば強度行動障害と呼ばれる子でした。四十年くらい前のことです。日本では自閉症の人たちへの支援の方向が明確ではなく、施設の方々も困っていました。彼の行動の激しさの内面に何があるのか。そう思っただけで、彼のまなざしに「僕のことを理解してくれ、人はどこに居るんだ」という純粋な気持ちを感じたのです。障害があってもなくても、子どもも大人も、人としていろいろな思いや葛藤の中で生きていく存在であり、仲間だということが私の原点になりました。なぜ彼がこんなに苦しまないといけなくなったのか。一番困っているのは彼なの

に、適切なかわりや暮らしに導くことができていないために、苦しみを背負わせてしまっているのではないかと。大学での自閉症児のライフステージに関する研究を通して、幼児期からの療育の必要性を感じ、毎日通園できる療育の場として誕生したのが「麦の子学園」です。社会福祉法人「麦の子会」の認可をいただくまで三年間、札幌市内のキリスト教の教会をお借りして、療育に取り組んできました。認可を受けてからも、自分自身が学びながら活動をしています。先進的な障害者福祉の取り組みをこの目で確かめたいと、お母さんたちと一緒にノルウェーに行き、アン・マーリット・セーボネスさん(元オスロ市長)とお会いした時、「ノルウェーでは、障害のある人が町の真ん中で生きる国づくりを目指している」というお話を聞きました。私の原点となった彼のまなざしが思い出され、日本でも、そんな社会を目指して歩むことを止めてはならないと確信したのです。そして、その後、幼児期に加えて学齢期が支援の対象とな

り、保護者からの声によって大人になってからも通える場所として成人期の支援も行うようになりました。むぎのこが、何かあった時に戻ってこられて、安心できる拠点であり続けたいと思っています。

### 「子育ての村」で大切にしていること

——乳幼児から成人までの幅広い年代への療育の中で、大切にされていることを教えてください。

自閉症の原因はまだ特定されていませんが、親の育て方が原因ではなくて、生まれつき起こる脳の機能障害が原因であることは捉えられています。感覚過敏、先の見通しが持てないことによるパニック、こだわり、対人関係を調整することが難しいことなどが主な特性です。人と関係を持つことに対する弱さという特性があるからこそ、「人って大丈夫なんだよ。怖くないんだよ。安心できるんだよ。ほっとできるんだよ」ということを乳幼児期の療育の中

で伝え、人間関係の基盤となる愛着関係を構築するよう取り組んでいます。乳幼児期から誰にも受け止められずに孤立して、愛着関係が成立しないまま成長すると、思春期になった時に心理的な失調が起こりやすくなります。このことは自閉症かどうかにかかわらず、どの子にとっても大事なことだと思います。自分を受け止めてくれる存在があること、そして人に頼っていい、助けを求めていいと子ども自身が感じ、自分と人を信頼しながら、安定したかたちで人に頼りながら大人になっていく。そんな育ちを私たちがの生活を通して積み重ねていってほしいと思います。

——北川さんが療育に取り組むにあたって、サンフランシスコでの脳性麻痺の障害のあるベスさんとの出会いが大きかったとお聞きました。

私が仕事を始めた頃、療育とは、障害を軽減するためにあると捉えられていました。歩けなかったら歩けるように、座れなかったら座れるように訓練する。車椅子に乗っていたベスさんが「療育を受けるべ

# 相すがた 人間のいのちの

連載

たびに、私が障害があるダメな人間だから訓練を受けなければならぬのかと思った」とおっしゃいました。周りがベスさんにとって最善だと思っていた訓練は、ベスさんにとっては、自分を否定され、障害を抱える自分自身を受け止められない悲しみの中に居続ける日々だったのです。

私たちが人を療育する側とされる側とに分断し、障害のある人の存在を無意識に否定していたのではないか。支援がはらむ問題の自覚と謙虚さを学びました。



むぎのこでは、その経験をもとに、障害を治していくことではなく、子どもの未来や生活全体を考えて、少しでも暮らしやすくするためにあることを根拠とした療育を行っています。子どもが楽しい遊びの中に細かい段階を作って、その子の発達段階に合わせて一つひとつを教えながら一緒に楽しむことを大切にしています。

「支援される側から支える側に回るお母さんたちの存在もとても珍しいケースですね。」

むぎのこの職員の三分の一がそのケースにあたります。あるお母さんはダウン症のわが子が生まれた時、ずっと親である自分に頼って生きていかなければならないこの子は、絶対不幸だと絶望して、たくさん涙を流したそうです。その子が今、二十歳後半になってグループホームに住んでいて、お友達もできた。「この子はみんなの中で生きていける」と思ったそうです。そして、自身のことを振り返った時、私にも、苦労しただけと一緒に子育てしてきた友達や仲間ができた。生まれた直後、いろんな思いがあつたけれど、こんな日が来るとは思わなかった。そういうお母さんたちが、自らの経験をこれからのお母さんたちにお返ししていきたいと、里親になったり、児童相談所から来ている子たちのサポートに入ってくれ

を大事な存在として受けとめることができません。そこから、保護者支援に力を入れます。一般の子育て支援との違いは、障害のある子がわが子としてお母さんたちの目の前に来たことをどう受け入れていくかという課題があることです。また、自身が虐待を受けて育ったり、育てにくさから子どもにも手をあげてしまうことは少なくありません。お母さん自身が人との関係性を作ることへの困難さを抱えている場合もあります。むぎのこでは、定期的にお母さん同士のグループカウンセリングを行っています。そこではまず、ありのままを受けとめます。自分の気持ちを我慢せず、つらかったら「つらい」と言ってもいい。わが子を受け入れられないと思つたら「受け入れられない」と言ってもいい。グループの中でお母さんの気持ち全体を受けとめます。当事者である仲間の存在が、その場を信頼できる雰囲気を作っているように思います。不安や悲しみは消えてしま

ら得られる安心感が、今度は子どもたちを受けとめていく安心感、安定感につながっていく。障害のあるわが子をお母さんたちが少しづつ受け入れていくのです。カウンセリングに加えて特徴的な取り組みは、ペアレント・トレーニングです。さまざまなシチュエーションによって、どう行動するかを練習します。例えばスーパーに行った時に子どもが駄々をこねる、おうちで暴れて手がつけられないといった具体的な場面を、子どもへの肯定的なかかわり方を繰り返して考えます。できていないことを否定したり怒ったりするのはなく、子どもができていくことをほめることを日常の暮らしの中で自然にできるようにすることが、子どもの安心感につながるのです。

「支援される側から支える側に回るお母さんたちの存在もとても珍しいケースですね。」

二〇一四年の「障害者の権利に関する条約」の批准に伴い、文部科学省が障害のある子とない子がともに学ぶインクルーシブ教育を推進していくにあたって、札幌市の学校がモデル校に指定され、むぎのこも一緒に取り組むことになったことがきっかけです。障害があっても、地域の中の学校と連携することで、皆と一緒に生活でき、子どもたちの状況は一人ひとり異なります。学校でも子どもたちが安心して過ごせる環境づくりのために、むぎのこの職員が学校にサポートをしに行きますし、どうしても学校に行けない子は、むぎのこのデイサービスに通って、学校と連携しながら少しずつ登校できるようにサポートをします。そして、障害のある子とそうでない子がただ一緒にいればいいということではなく、子どもたちへの教育をきちんと保障した上で、一人ひとりがその学校の一員として大切にされるといふ校風をもった学校が増えているのではないかと願っています。当時、一緒に取り組んだ学校の校長先生が今はむぎのこの職員として、教育と福祉の現場の連携の架け橋になってくれています。学校だけでなく、地域で子どもたちとかわる機関の代表者と積極的に情報交換を

行っています。障害がある子とその家族を支援するためには、地域全体の支援力を高めていくことが大切だと思っています。

子どもだけではなく、保護者の支援を行う施設は全国的に見ても極めて珍しいと思います。なぜ保護者の支援に取り組まれているのでしょうか。

子どもにとって保護者は、自分を一番大事にしてほしい存在です。だからこそ、保護者自身が安心できないと、子どものこと

「親鸞聖人は、人と生まれたということとは、関係性を生きる者として生まれたことであると教えてくださっています。子どもを真ん中にした支援、そして支援する者同士もつながりあえる、むぎのこのあたたかい取り組みをお聞きし、あらためてそのことを大切にしたいと感じました。」

人は生まれてくる時、何一つ自分で選んできません。しかしみんなが、生まれてきてよかったと思える日々、そして、この世は生きるのに値すると思える社会、すべての人が尊敬され敬意を払われる世界を作りたいと活動して二十七年が過ぎました。障害を持つ子やその保護者が抱える問題をそのままにせず、安心感を少しずつ増やしていく。自分が戻ることのできる場所があつて、自分と人を信じる土台を作ること、子どもは自分の行きたい方向に行ける力(自立)がついていくと思っています。

一人の子どもを育てるには、地域社会の大人の知恵と力と愛と笑顔が必要です。残念ながら、障害があるために、生きることに困難な環境と社会のシステムがまだまだあります。命はどんな状況に生まれても、障害があつてもなくても、一人ひとりが命を輝かせる権利を持つ社会の宝物です。これからもそのことを大切に、支援を続けていきたいと思っています。(了)

子どもだけではなく、保護者の支援を行う施設は全国的に見ても極めて珍しいと思います。なぜ保護者の支援に取り組まれているのでしょうか。

子どもにとって保護者は、自分を一番大事にしてほしい存在です。だからこそ、保護者自身が安心できないと、子どものこと

「親鸞聖人は、人と生まれたということとは、関係性を生きる者として生まれたことであると教えてくださっています。子どもを真ん中にした支援、そして支援する者同士もつながりあえる、むぎのこのあたたかい取り組みをお聞きし、あらためてそのことを大切にしたいと感じました。」

人は生まれてくる時、何一つ自分で選んできません。しかしみんなが、生まれてきてよかったと思える日々、そして、この世は生きるのに値すると思える社会、すべての人が尊敬され敬意を払われる世界を作りたいと活動して二十七年が過ぎました。障害を持つ子やその保護者が抱える問題をそのままにせず、安心感を少しずつ増やしていく。自分が戻ることのできる場所があつて、自分と人を信じる土台を作ること、子どもは自分の行きたい方向に行ける力(自立)がついていくと思っています。

一人の子どもを育てるには、地域社会の大人の知恵と力と愛と笑顔が必要です。残念ながら、障害があるために、生きることに困難な環境と社会のシステムがまだまだあります。命はどんな状況に生まれても、障害があつてもなくても、一人ひとりが命を輝かせる権利を持つ社会の宝物です。これからもそのことを大切に、支援を続けていきたいと思っています。(了)